

中日双语图文读本

やつぱり虫の眼で見たい

感悟日本

毛丹青〇著



华东理工大学出版社





日本語をみつめた その瞬間

ひとの記憶装置は一人一人違うのではないか、そんな気がする。一つの言語だけでもものを書いていた時には、さほどそのことを強烈に感じることもなく、無感覚でさえあった。ひとが全く聞き取ることのできない言語に触れるとき、それは言葉ではなく雑音であり、嬰兒が他の人間を見るのに似ている。人とそうでないものの区別さえつかない。しかし、絶えまない重複、倦まぬ反復によって、いつしか音声と情景が心の奥底に刻み込まれ、反射機能が形作られる。そうやってはじめて人は外界の事物に多重的な意味を持たせることができるのだ。

二つの言語を用いての執筆が私の一つの重要な仕事となってきた。幸運にも、私が使っている中日二種類の文字は、形の上でどちらも突出した視覚的効果をもつ。とりわけ漢字の融和の中に、

ある時は重なり合い、ある時は通りすぎた見知らぬ人のように、同じ形状が全く異なる内容を含んでいる。ある学者は、一つの言語を掌握する過程は順を追って漸進する道のりだというのが、私の考えは少し違う。少なくとも外国語で執筆することにおいては、私自身よくわからない。ある日突然二つの言語が混ざってしまったからだ。それもある深夜、夢の中の出来事だ。

その日の昼間、私には表現したい強烈な欲求が起った。口は休むことなく日本語を喋り続け、それまで試したことのない書き言葉を操った。その時の私にしてみれば、いわゆる表現欲とは何かを表現するためではなく、一つの斬新な表現を生み出したいという衝動に近かった。話すことは一種の瞬間的な行為であり、唇の運動であって、発声された言葉の意味は具体的な環境のもとにあってはじめて成立する。これと反対に、書くことは思慮の過程であり、生動的な文字は思考の吐露である。まるで万馬奔騰のごとくやってきた考えを、内心の苦痛を経て一滴一滴射出する言語による印象である。

その日の夢はだいたいこんな夢だった……巨大な天幕の上で二枚の透明な原稿用紙が翻っていた。天幕は端が見えないガラスのようであり、紙は刺繍細工のように繊細だった。顔を遮ったとしても分からないほどだろう。そのうち一枚の原稿用紙に書かれた文字は私の書いた日本語だ。もう一枚は私の中国語。二枚はまとわりついて離れず、しかし重なり合わない。近寄ったかと思うと、翼を翻すように舞う。心を落ち着けてよく見てみると、二枚の原稿用紙は異なる色調、異なる模様を見せているようだった。日本語は流れる清らかな泉水、中国語は群山雲海のようだ。一つは細やかで柔らかく、一つは粗放で果敢である。私は落ち着いて観察し続けた。日本語のほうは文字の運びに緩急がある。漢字は仮名の海に浮かぶ小さな島のように、もともとは漢字の部首だった仮名文字は、舞妓が飛び石を歩むようにして連なる。中国語のほうの紙は筆跡も濃く重々しい光彩を放っている。二枚の原稿用紙は、次第に近寄り、私の眼前で交差し始めて、目くるめく動きを示した。私はこのときはじめて二枚の原稿用紙の中に重複する漢字がいくつもあることを発見した。ひょっとするとこの重複した文字が、二枚の原稿用紙の距離を近づけて

いる最終的な動力なのではないか？しばらくすると、これらの文字は突然跳ね上がった。そして、それらはそれぞれの原稿用紙からゆっくりと浮き上がり、空中でぶつかって、黒い固まりとなった……日常、印象、微笑、体験……同じ相貌の漢字が空気中で沸騰したようになった。このとき、どこからか現れた魔力によって私の体は震えが止まらなくなった。私は必死になって口を開け、空気中の沸き出した漢字を一つも漏らさずに啜えようとした。そして、温度はどんどん上がり、私の身体は熱くなり、涙が湧き出て、発狂した。

この夢の最後の場面で、烈火のなかから必死でもがきはい出したことを今でも鮮明に覚えている。そして、それ以来、日本語は私にとって確実に神奇なものに変わった。慣れ親しんだ漢字が機械の上の鋳物のようで、ある時は私はそれらを溶かして仮名の中に注ぎ込む。反対に仮名を多用して薄くなりすぎた文章には、漢字を運んでくる。そうすると、自分が燕のごとく身軽になった。

言語は檻であり籠である。しかし、同時に言語は、開放された広場でもある。特に新しい言語がある人の母国語に向かって挑戦を始め、その人の母国語と格闘しているとき、それはまさに新しい表現の契機が始まったことを意味する。もし、人の記憶装置がそれぞれ異なり、装置の定型が必ず言語に依存するのであれば、こんな推量も成立するかもしれない。少なくとも私においては、母国語の記憶装置は丸い。そして日本語のそれは四角い。四角いものには角がある。角があるならば磨き続けたい。

毛丹青

2008年1月



凝视日语的那个瞬间

凭某些感觉,我发现每一个人的记忆装置是不同的。原来只能用单语写作的时候,我的感受并不强烈,甚至有些麻木。人一开始接触完全听不懂的语言时都觉得它是杂音,就像婴儿看见别人一样,他们分不清人与非人的区别。但是,不断的重复,不厌其烦的再来一遍,却把声音与景象刻入了人的心灵,变为了心灵上的反射机能,于是人才会对外界的事物赋与多重意义。

用两种语言写作是我的一项重要工作。值得庆幸的是,我使用的双语是中日两种文字。从表形上看,两者都具有突出的视觉效应,尤其在汉字的融合中,有时如出一辙,有时竟然像过路的陌生人一样,同样的形状却包含了完全不同的内容。有的学者说,掌握一种语言是循序渐进的过程,可我的感受有所不同,至少在外语写作这件事上,我自己都弄不明白。因为曾经有那么一天,我居然把两种语言混淆了,而且是在一个深夜,在一次梦境中。

白天,我有一股强烈的表达欲望,为了用挂在嘴皮上的喋喋不休的日语,为了用一种从来没有尝试过的书写语。这对当时的我来说,所谓的表达欲望几乎不是为了表达什么,而是为了一个崭新的表达而产生的冲动。说话等于一次瞬间的行为,或者是一次嘴巴的运动,至于发声中那些约定俗成的意义只有在具体的语境下才能成立。与此相反,书写则是一次思虑的过程,生动的文字可能是文思喷涌时的流露,犹如万马奔腾而来,但也有可能是经历了内心的煎熬以后一点一滴投射出来的话语印象。

那天的梦境大致是这样的:在巨大的天幕上,有两张透明的稿纸翩翩起舞。天幕像一块不见边际的玻璃,稿纸细如抽纱,迎面遮住你的脸也不会让你发觉。其中一张稿纸的文字是我的日语,另一张则是我的中文,它们缠绵不绝,但谁也不跟谁重叠。有时似近似远,有时双翼飞扬。我定神望去,两张稿纸似乎展示着不同的色调与纹路。日语像流水清泉,中文如群山云海,一个是细腻而优柔,一个是粗放而果断。我继续定神望去,日语稿纸上的文字时缓时急,汉字恰似一座座的岛屿,浮现于假名的海洋之中,那些原本是汉

字的偏旁部首的假名近乎于京都艺伎的碎步，间隔窄，但步步紧随。中文稿纸上的文字依然浓装艳饰，给人一种沉重而光彩的感觉。两张稿纸越飞越近，它们甚至在我的眼前开始了交叉往返，一直到我觉得晃眼的时候，才发现两张稿纸上有许多汉字是重复的。难道这些重复的汉字是拉近两者距离的最终动力吗？稍候，这些字符居然跳跃起来，然后，它们从不同的纸面上冉冉升起，在空中碰撞，化作一对对的黑色方块……日常，印象，微笑，体验……所有这些貌相如一的汉字在空气中蒸腾。这时，也不知从哪里出现的魔力，突然震撼了我的全身，于是，我拼命地张开嘴巴，在空气中咬住那些蒸腾的汉字，一个也不放过。后来，温度居高不下，我热了，流泪了，疯狂了。

那场梦的最后一个场面是我从一片烈火中挣扎地爬了起来。而且从那以后，日语确实变得神奇了。那些熟悉的汉字就像一台机器上的铸件一样，有时我想融化它们，就往里面硬灌假名。反过来，假名用得过多而使文章太稀的时候，我干脆就把中文的汉字生搬进来。如此一来，我发现自己居然身轻如燕。

语言是一座牢笼，但同时，语言也是一个开放的广场。尤其当新的语言开始向你的母语挑战，开始跟你的母语叫劲的时候，这正是为你开辟一个新的表达的契机。如果人的记忆装置不同，而装置的定型又必须依靠语言的话，以下的猜想或许也能成立。至少在我身上，母语的记忆装置是圆的，而我的日语则是方的。是方的，就会有棱角。有棱角，就要坚持打磨。

毛丹青

2008年1月

目 录

落桜の季節	2	98	落櫻的季節
地下八百屋	11	103	地下蔬菜店
舞妓純子	16	105	舞伎純子
わが町、神戸よ	26	109	我的城市——神戸
神戸ルミナリエ	35	114	神戸的圣灯
蝉の舞	41	117	蝉舞
明石鳥人	49	121	明石飛鳥人
天売島とマグロの目	54	123	賣天島和金槍魚的眼睛
太陽の門	68	129	太陽之門
カエル祭	74	131	青蛙祀
吉田山莊	83	136	吉田山莊
川向こうの鐘の音	88	139	隔岸鐘聲





キャリアサポート
センター
くこと



雨中的落樱带给人丝丝伤感与惆怅。

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

落櫻の季節

桜の散り際は、花びらの一枚いちまいが飛旋する白い点となって、空气中で風のままに漂っていたかと思うと、突然、急降下して落ちる。その激しさは花びらが道行く者に「地面に落ちて砕け散らずにはおられないのだ」と告げているようにみえる。だが花びらが急速に落下しはじめる瞬間とはいつのことだと聞かれても、私には答えようもない。風に吹かれたとき、雨に濡れたとき、そして雷にうれたときでは、花びらの墜落のしかたもまるきり違う。容赦なく地面に叩きつけられることもあれば、空中で乱舞した後にはやっと落ちてくることもある。風も雨も雷も、空の上から花の満開の時期を狙ったように襲ってくる。

毎年の落桜はいつも同じだが、ひとつだけ違うのは、私が奥村君の悲しみを知ったことだ。奥村君が落桜のなかで涙を禁じ得ない体験をし、私がそれを知ったのだ。

私と奥村君は神戸の震災のなかで知り合った。そのとき避難所になっていた小学校の体育館で、彼は一人娘のために段ボール箱を組み立てて風除けを作り、体育館の破れた窓から隙間風が吹き込む夜にはいつも、自分の広い背中で風除けを支えて、娘に風があたらないように工夫していた。風が強い夜には二枚の段ボールを自分の背中にくくりつけ、夜通し身を挺して娘の身体を覆ってやり、自分は娘のために一睡もしないこともあった。奥村君がこれほどまで娘を慈しむのには理由があった。母親は産後の肥立ちが悪く、娘が生まれてほどなくして世を去っていたのだ。このことは後に私と彼が親しくなってから、酒を飲んだときに彼が苦しげに打ち明けてくれて知ったことだ。

人の運命は前もって決められている、どんなに変えたいと思っても変えられない、奥村君は私によくそう言っていた。彼の娘が生まれたのはちょうど桜の散る季節であったそうで、窓の外には安産を願うように桜が降りしきっていたという。もし若い母親の死がなければ、その年の落桜はとりわけ美しいものになっていたはずだ。

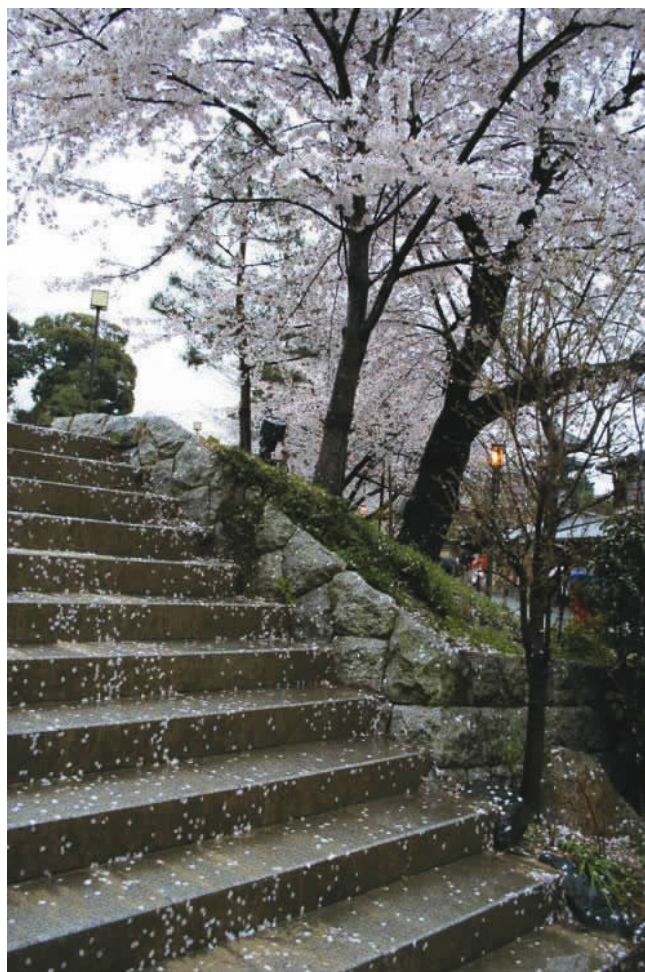
やがて、不幸がまたも奥村君を襲った。阪神大震災から二年目にあたる年、娘が突然病に倒れて昏睡状態となり、医師の診断によってはじめて、「筋萎縮性側索硬化症」という難病であることが分かった。長くもってあと一年ほどの命だと言い渡された。奥村君が医師からこの無情な宣告を受けたのも、また落桜の季節だった。彼は、今年の桜が散る頃は娘がこの世を去る時期になるかもしれないと悟^{さと}った。

この一年、彼は全身全霊を傾けて、娘を看病し、娘の入院が長引くにつれ、早朝深夜を問わず娘のそばにいられる貴重な時間を一分一秒でも長くしようと努めるようになった。だんだんと、娘も自分が重病であることに気づいたのだろう、毎日父親の明るい笑顔を見るたびに彼女の気持ちはかえってふさぐようになった。

とうとう一年一期の桜が咲いた。競い合う花の美しさは奥村君の悲哀の前^{まえ}触れでもあったのだが、彼は父親として娘の心を温めることだけを心から願った。

娘の病室の窓の外には一本の桜の木が植わっており、それがただ一本の桜だった。幹は傾き空を向いた枝ぶりは老人の蓬^{ほう}髪のような木であったから、満開になった桜は奥村君の目には、それはことさら生命が流す涙のように映った。彼は娘に話しかけた。

「見てごらん。なんて桜がきれいなんだろう。花の咲く期間は短いけど、花はとても強くて丈夫なんだ」



樱花像一个使者,牵系着父亲与女儿的心灵。

「桜はもうすぐ散るんじゃないの？」

娘の答えは、毎日病床から桜の木を注意深く眺めたからこそのものであった。花が咲き花が散る瞬間が、不治の病の少女にとっては穏やかな一刻なのだ。そして同時にその穏やかさが日々の^{わずら}煩いを、死への恐怖さえも溶かしてくれる。

「地面に落ちててもまだ花は咲いているのさ。花びらが道にしきつめられて、それはそれはきれいなんだから。ちょうどおまえの好きなお家のピンクのじゅうたんみたいだよ」

父親が落桜をこのように言い表したのは、彼自身がそう感じたというよりも、彼の唯一の希望、すなわちたとえ地面に落ちて砕けてもその生命は続いていくのだという希望を言葉にしたものだったろう。娘は父親の話を知ると、それ以上は言わず、ただそっと、「お外に花を見に連れてってくれる？」とたずねた。

「明日見にいこうね」

奥村君は大きくうなずき、つとめて顔中を笑顔にして約束した。

夜、突然強風が吹き荒れ、無数の花びらを際限もなく空に巻き上げた。窓の外の花吹雪は、^{ふぶき}天上からざあっとぶちまけられたように激しく窓にあたり、ぱらぱらと音を響かせた。そのとき、誰かが我が家の門をたたき、馴染みのある声が聞こえてきた。

「毛さぁん、開けてください。わたしです、奥村です」

私が慌てて門を開けに行き、目にしたのは、蒼白な顔をしてあえぐ奥村君だった。

「ちくしょう、病室の外あの桜の木の下に積もった花びらが全部風で飛ばされて、残ってないんだ。娘には明日積もった桜を見にいこうと約束したのに……こんなに遅く本当に悪いけど、一緒に桜を拾い集めてもら

えないか。明日の朝には風は止みそうだから、木の下に撒いておけば娘に見せてやれると思うんだ」

奥村君の話しかたはほとんど哀願あいがんに近く、そしてその哀願には悲しみが染みとおっていた。私は慌しく服を着替えて彼の後からついていった。彼が持ってきた黒いビニール袋を受け取ると、私たちは板宿いたやど¹に急いだ。神戸の西から板宿方面に曲がりくねった道路があり、その道の街路樹がすべて桜なのだ。が、夜の闇に包まれたこの通りでは桜の花そのものは見えず、ただ枝の一本ずつが、発光するワイヤーのように風に揺れているように見えるばかりだった。この狂風のなかでは花びらは雨霰あめあられと降り注ぎ無秩序に空中を旋回し、あるものは空中に飛び去り、あるものは地面に叩き付けられた。

奥村君は道に沿って腰をかがめ、地面の花びらを拾い集めながらよるめきつつ風に逆らって進んだ。時おり両手でビニール袋の口を開け空中でばたばたと泳がせると、そのたびに大きく口を開けた袋は空中で踊る花びらを次々と吸い込んでいった。彼の顔は汗で濡れてきたが無言のままだった。私も、彼を真似て袋を開いて空中の花びらを受け止めるだけでなく、道路の反対側で彼と競うようにうずたかく吹き寄せられた花びらを拾い集めた。私たちはこうして進んでいった。その晩、彼はもう娘のことを口にしなかったが、それでも私には彼の不安な心が感じ取れた。

やっとのことで袋が満杯になった頃、夜空に明るい月が顔を見せた。奥村君の額に光る汗が彼の悲しみの記録のようだ。娘の死期に直面した今、父親には打つ手もなく、彼にできることは娘に一度だけでも落桜けんらんの絢爛さを見せてやることだけなのかもしれない。落桜は生命の力強さの象徴だから、そして娘との約束だから。私は拾い集めた花びらが袋いっぱい

1 神戸市の地名。



なると奥村君に手渡した。彼は深々と頭を下げ、もう一方の手には自分で詰めた袋を握りしめて病院のほうに歩み去った。遠ざかる彼の後ろ姿がくるくる黒々とした夜の深みのなかで小さな点になるのを見届けつつ、私の胸はいっぱいになった。

翌日の午後、奥村君が病院から電話をかけてきた。その声は久々に興ひさびさ奮ぎみだった。

「朝になって、本当に風はやんだよ。昨日集めた花びらをあの桜の木の下に広げると、ちょうど朝日も出て花びらを敷きつめた木の根元から温かい光が広がった……これで約束を守れたと、娘と一緒に病室をでてまっすぐ落桜の前に連れて行ったよ。娘は何も言わずに車椅子のうえから長いこと目の前の何もかもを見ていた。何も言わなくても、私には娘の目が潤んでいたのが感じられた。毛さん、ありがとう」